

お米のはなし

お米や稲に関するちょっとした情報・豆知識を専門家が綴る「お米のはなし」の第29弾をお届けします。

(シリーズ担当：R.I.)

29. 昔と今の米作り（その2. 苗作り）

② 苗作り



苗を育てる田んぼを苗代(なわしろ)と呼びます。土を水で柔らかくこねた苗代に種籾を播き、苗を育てます。水苗代というやり方です。1ヶ月くらいしたら育った苗を苗代から取り、本田に持って行って配置し、田植えに備えます。

図 29-1 江戸時代（元禄）の苗取り風景



苗代の床を少しあげ、その上へ種籾を播き、上に油紙かビニールをかぶせて苗を育てます。この保温折衷(せっちゅう)苗代という方法によって、寒いところでも苗の育ちが早く、また良い苗がとれるようになりました。(昭和41年 山形県酒田市 昔から寒冷地では、「苗半作(なえはんさく)」と言い、良い苗を作ればその稲作はもう半分は成功したようなものと考えましたので、育苗に大変気を使いました。

図 29-2 昭和30～40年代の保温折衷苗代への播種



苗箱（長さ 60cm、幅 30cm、深さ 3cm）に土を入れ、田植機で植える苗を作ります。播種用の機械が自動で全体に散らばるように粃を播いてくれます。苗は暖かいビニールハウスの中で育てます。

（平成 6 年 新潟県黒埼町）

図 29-3 現代のハウス内の苗代

（出典）図 29-1～29-3、農水省 HP 子供のための農業教室

http://www.maff.go.jp/j/agri_school/a_kome/index.html から引用

関連する用語の解説：

【育苗法の発展】

- 稲の育苗法は、水苗代、畑苗代、折衷苗代、保温折衷苗代、ビニール畑苗代等での育苗から、施設・資材を利用した育苗へと発展してきました。
- 現在は、機械移植に対応した箱育苗が一般に普及しています。
- 育苗の場所（置床）は、ハウス、トンネル、露地（水田、畑）などさまざまです。

「出芽法」

- 出芽法には、電熱育苗器利用、育苗箱の積み重ね法、平置き法などがあります。
- 積み重ね法では、ハウス内ではビニールシートなどで包んで保温します。
- 平置き法では、ハウスやトンネル内に置き、保温資材や遮光シート類で被覆します。
- 温暖地・暖地では、均平にした水田への直接の平置きも多くみられます。
- おもに出芽法、置床場所などで区別される育苗様式は、当地の作期や育苗時期の気象条件で異なり、地域ごとに特徴があります。
- また、生産現場における詳細な育苗法も、播種量や保温資材の使い方などでさまざまです。

【最近の育苗資材、育苗法】

育苗作業は稲作の全労働時間の約 6 分の 1 を占めています。そこで、育苗の省力、低コスト化の必要性から各種の新しい資材、育苗法が開発されています。

「省力機械」

- 播種機：土入れから、灌水、消毒、播種、覆土を一貫して行えるタイプが普及しています。
- 育苗器：中の温度分布が均一になる、加湿方式のものが普及しています。
- 種子の予措よそ用機器：1 台で種子の浸漬、薬剤消毒、温湯消毒、催芽に利用できる機器が開発され、利用されています。

「資材」

- 培地・マット資材 : 軽量化や保水性、通気性等を工夫した、各種培土 (ばいど) や人工床土、ロックウールなどの各種成型培地、籾がら成型マットなどが開発され市販されています。
- 被覆シート類 : 出芽や育苗管理に適切な温度が確保しやすい、各種シート類が出てきました。晴天時に温度が上がりやすい資材や上がりにくい資材など、特性をよく理解して、自分の育苗に適したものを使いましょう。

「肥効調節型肥料」

- 育苗中の追肥の手間を省くため、床土への肥効調節型肥料の混合利用法が実用化されています。
(目的が育苗とは異なりますが、本田の生育期間に必要な分を全量混合する方法もあります)

(みんなの農業広場 <https://www.jeinou.com/benri/rice/2008/05/010930.html> から引用)

発行:(公社)国際農林業協働協会(JAICAF)
〒107-0052 東京都港区赤坂8丁目10-39 赤坂KSAビル3階